

【スペインの巡礼路「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」】

四国といえば八十八箇所が有名ですね。地元に住んでいる私たちにとって、巡礼装束姿のお遍路さんの姿は非常に親しみのあるものです。

さて、この「お遍路」とは巡礼のことですが、こうした巡礼の文化は日本だけのものではありません。今回は世界遺産にも登録されているスペインの巡礼路「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」をご紹介しますと思います。

四国4県に点在する札所ひとつひとつにお参りしていく八十八箇所のスタイルとは違い、スペインのお遍路はガリシア州にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラ教会（キリスト教・カトリック教会）を目指して巡礼する、というものです。

サンティアゴの巡礼路はひとつだけではなく、フランスから入る「フランス人の道」、ポルトガルから入る「ポルトガル人の道」など様々です。スペインではナバラ州からカスティーリャ・イ・レオン州の北部を西に横切り、ガリシア州へ向かう「フランス人」の道が主要です。ちなみに丸亀市の姉妹都市サンセバステアーンを通る巡礼路はフランス、スペイン国境の街イルンからスタートし、イルン⇒サンセバステアーン⇒ビルバオ⇒サンタンデル⇒オビエド経由でガリシア州へ向かう「北の道」と呼ばれる道です。

巡礼者は巡礼のための身分証明となる巡礼手帳（日本でいう「ご朱印帳」）を持っていますが、この手帳を持っていると巡礼宿に宿泊することができます。巡礼宿は公営のものと私営ものがあります。宿泊した宿で手帳にスタンプを押してくれるのですが、それが巡礼の証明となります。そして、サンティアゴ・デ・コンポステーラ教会に到着すると「コンポステーラ」と呼ばれる巡礼証明書がもらえますが、条件は徒歩で100 km以上歩くこと（自転車では200 km以上走ること）です。

その巡礼路にはホタテ貝の標識が建っていますが、これは八十八箇所の道標のようなものです。でも、どうしてホタテ貝なのかが気になりますね。

サンティアゴ・デ・コンポステーラは「コンポステーラの聖ヤコブ」という意味で、イエス・キリストの12人の弟子のひとりである聖ヤコブが殉教し、その聖なる遺骸を埋葬しているのがコンポステーラのことからその名がつけられました。そして、聖ヤコブの墓の上に建てられたのが現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラ教会です。

ちなみに「ヤコブ」はヘブライ語、「サン（聖）・ティアゴ(Tiago)」はスペイン語の名前です。ちなみに英語は「セント・ジェームス」、フランス語は「サン・ジャック」、イタリア語では「サン・ジャコモ」です。そして、この聖ヤコブのシンボルがホタテ貝なのです。ホタテ貝がシンボルとなった由来は諸説あり、ヤコブが布教中にホタテ貝で水をすくって飲んでいたので、ヤコブの遺骸が乗せられていた船の底にホタテ貝がたくさんついていたので、昔の巡礼者がホタテ貝を食器がわりに使ったから・・・など様々です。

「道」が世界遺産に登録されているのは、現時点では、このサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路と日本の熊野古道のふたつだけです。そして今、「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録に向けて四国4県が取り組みを行っています。遠く離れたスペインの巡礼路ですが、こうした話を聞くとだんぜん興味が沸いてきますね！

